

夫婦の

「コミュニケーション」

唄野 絢子(はいの あやこ)

先月号で、大阪府堺市の佐々木文吾・優子夫妻の出会いについて紹介しましたが、優子さんのお母さまの唄野絢子さんは、家庭・夫婦の問題について長年講演と執筆活動を続けておられる方です。

今回は、唄野絢子さんがどのようにして夫婦問題に関心を持つようになり、またどのようにして学び、教えるようになったのかをうかがいました。

●「大事なことが見えていない」

「唄野さんが夫婦問題について学び、また教えるようになったのは、何がきっかけですか。」

唄野 1977年、私が39歳の時、初めて他の教会から招かれて証しをしました。最後の質問の時間に、「うちの教会の若いカップルはとてもケンカが多いのです。どうすればケンカをしない仲良しの夫婦になれるのか、秘訣を教えてください」と聞かれ、困りました。

どんなに知恵を絞っても何も出てこないのです。苦し紛れに私は、「ケンカするのに、時間がかかるでしょう。私たち、ケンカする時間、なかったのです」

誰の助けにもならない答えをしたとたん、私には大事なことがまだ見えていないということがはつきり分かりました。

いったい何なのだろう。主は、私の内側に

この求めを呼び覚まし、それに応えようと待ち構えていてくださったのです。

実は、私は学生時代に「聖書の結婚観」を聞き、天が開けて御国の空気を初めて吸った経験をさせていただきました。

結婚してからもずっと、主人と一緒にKG(Kキリスト者学生会)に関わり、学生たちに「結婚」の分科会で話す機会を与えられてきていました。この経験は「人はその父母とを離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体となる」という私が生涯かけて教えられるみことばの深みが開かれていく次のステージへの主の招きだったのです。

●深い愛のまなざし

唄野さんの著書には、ハンス・ビュルキ、アゴ・ビュルキ夫妻のことがよく出てきますが、このご夫妻との出会いはどのようなものでしたか。ビュルキ夫妻の魅力とは何ですか。

唄野 初めて我が家においで下さったのは、ハンス先生おひとりでした。アゴ先生との出会いは、1978年、私どもがヨーロッパ旅行の途中、スイスの先生方のお家に3泊4日、お世話になった時でした。

最後の日、ハンス先生はご自分の山の隠れ家に来て行ってくださいました。ここに身を置いたとき、この静まりこその私の魂が求めていたものであったと気づき、動けなくなりました。ハンス先生と主人は、私の魂のうちに起こった出来事を優しく見守ってくれました。その後、先生のセミナーに十回も出させていただきました。

ハンス先生は、主の前に静まることは回心

の時と同じほど大切なことであることを教え、また経験させてくださいました。統合された人となって、つまり全人格的に神に応答していくように、少しずつ丁寧に導いてくださいました。

著書『主の弟子となるための交わり』(いのちのことば社)を通して今も教えられ続けています。個人的な親密なお交わりをたくさん頂戴しましたが、その都度、まともに向き合ってくださいました。時には鋭い叱責のことばもいただきました。「あなたをそのようにつき動かしているものは何なのか?」と。

アゴ先生からは、夫婦のコミュニケーションのことを様々なエクササイズを通してたくさん気づかせてもらいました。また、著書『変わる妻たち』(新曜社)を通して、夫と妻とのかかわりの世界を深く考えさせられ、いかに夫と妻の橋かけをするかを教えられています。アゴ先生の間人洞察の深さ、質問の鋭さには目を見張る思いでした。

ビュルキ先生夫妻の魅力は、人格を深く尊重し方であり、深い愛のまなざしです。

●相手のことが分かっている

「ビュルキ先生は、「全人格的出会い」「全人格的結婚」ということを教えられたそうですが、それは分かりやすく言つとどういうことでしょうか。」

唄野 ビュルキ先生ご夫妻による日本で初めてのカップルズ・セミナーで、先生は「結婚生活で一番大切なものは何だと思ふか?」と質問され、「それは自由だ」と言い、コリント人への第二の手紙3章16〜18節を読まれました。

た。

人が主に向くなら、そのおおいを取り除かれるのです。主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

何のことだか分からないままに、そのことは心に留まりました。

それから、次のような作業をさせられました。「配偶者とどんなことを話したいか」を考え、そのことを相手に話し、聞いた方がそれを自分のことばで言い直して復唱するという作業です。

やってみて驚きました。聞いているつもりで相手の話しを聞いておらず、相手のことが全く分かっていなかったことに気づかされたのです。結婚して16年目、私が40歳のときの経験でした。

この経験と先のコリント人への手紙のことがどどのように関わるのか、長い間考えていましたが、その後、少しずつ目が開かれました。

人、つまり私の心が主に向くとは、人となられた神ご自身、イエス・キリストのご人格と私の人格が向かい合うこと、すなわち主にお会いすることです。(以下略)